

FBI とゾルゲ事件

宮城与徳を送り出した男たち

進藤 翔大郎

Shotaro SHINDO

2025.05

ROLES REPORT No.41

FBI とゾルゲ事件

宮城与徳を送り出した男たち

進藤 翔大郎

Shotaro SHINDO

2025.05

発行所： 東京大学先端科学技術研究センター
創発戦略研究オープンラボ (ROLES)
〒153-8904 東京都目黒区駒場 4-6-1

電話： 03-5452-5462

Web サイト： <https://roles.rcast.u-tokyo.ac.jp/>

ISBN 978-4-910833-03-3

はじめに

1941 年、太平洋戦争開戦前夜に、日本を舞台として行われた国際的諜報事件であるゾルゲ事件が発覚する。このゾルゲ諜報団の形成過程においては、沖縄出身のアメリカ共産党員宮城与徳が 1933 年に日本に帰国し、ゾルゲ諜報団の日本国内の諜報活動において重要な一角をなした。本稿は、ゾルゲ事件の構成員である宮城与徳の日本派遣に関与した矢野勉と木元伝一に注目し、彼らに対する戦後 FBI の捜査過程を分析対象とする。具体的には、アメリカ国立公文書館で新たに公開された矢野勉に関する史料（豊田令助ファイル）を主に参照し、矢野と木元伝一に対する FBI の捜査過程を明らかにすることで、これまでのゾルゲ事件研究が見落としてきた冷戦初期の FBI にとってのゾルゲ事件の意味を明らかにするものである。とりわけ、ゾルゲ事件をアメリカ国外のスパイ事件として理解する従来の枠組みに対し、本稿は新たな視点を提示する。すなわち、戦前から戦後にかけてアメリカ国内の治安・情報体制の中でゾルゲ事件がどのように再編され、冷戦初期の安全保障の文脈に位置づけられたかを検討する。

宮城与徳警察訊問調書には、宮城与徳がアメリカ共産党日本人部に所属した経緯および西海岸から日本に派遣された経緯について、①1929 年頃アメリカ共産党員の矢野という人物の勧誘によって宮城はアメリカ共産党日本人部に加入した、②1932 年頃矢野が国籍不明の白人のコミンテルンの男を帯同し、東京に行くように宮城に指示を行った、③宮城は白人から今後はロイという人物と連絡するように指示をされ、1932 年 9 月矢野とロイから 1-3 か月間の日本派遣の指示をされた、と記載がされている¹。これまでのゾルゲ事件研究においては、これら宮城供述の中に登場する、宮城の日本への帰国を強く促した、矢野勉、ロイ、白人の男、という 3 人の人物が重要な解明対象の一つとして位置づけられていた。特に、当該の問題の解明は野坂参三のアメリカにおける地下活動の解明とも関連する問題でもあり、早くから注目されてきた経緯がある²。その後、ソ連崩壊後にロシア公文書が部分公開されるとともに、クリントン政権期に行われたアメリカ情報機関の大量の機密文書の機密指定解除により、ゾルゲ事件研究の水準は飛躍的に高まった。とりわけ、渡部富哉および加藤哲郎の両氏によるゾルゲ事件研究の一連の成果は特筆に値する。本研究課題の関連では、渡部富哉は、ソ連崩壊後に公開されたモスクワ公文書館の文書入手し、宮城与徳供述の中にあるロイがアメリカ共産党員の木元伝一であることを明らかにし、ロイ＝野坂参三説の誤りを示している³。また、加藤哲郎は、アメリカ国立公文書館で公開された後述の「木元伝一ファイル」を活用することで、戦後アメリカ軍情報機関が木元伝一＝ロイであることの追跡を行ったことを明らかにしてい

¹ 『現代史資料 24 ゾルゲ事件 4』みすず書房、1971 年、374、388-389 頁。『現代史資料 3 ゾルゲ事件 3』みすず書房、1962 年、311 頁。

² 野本一平『宮城与徳：移民青年画家の光と影』沖縄タイムス社、1997 年、195-200 頁。

³ 渡部富哉『革命の狼煙はまだ揚がらぬか コミンテルンの秘密組織 OMS の長ビャトニツキーに宛てた 野坂参三の極秘電報が明かすアメリカ工作の真実』社会運動資料センター。

る⁴。

なお、ゾルゲ事件における宮城与徳の解明は沖縄研究・移民研究という観点でも研究が進められてきた経緯がある。沖縄研究の比屋根照夫は、宮城を含む沖縄出身日本人移民を中心に展開された 1920 年代初頭のロサンゼルスにおける社会運動の中に近代沖縄の苦悩を見出そうと試みている⁵。また、アメリカにおけるアジア系移民研究ではジョセフィン・フォウラー（Josephine Fowler）は、ロサンゼルスにおける日本人共産主義運動において 1920 年代の沖縄出身者のコミュニティの急進的政治的潮流がその土台を形成したことを指摘している⁶。なお、フォウラーはこの研究過程でロシアの史料調査も丹念に行い、その成果はジョセフィン・フォウラー文書としてカリフォルニア大学ロサンゼルス校チャールズ・ヤング図書館に収められている。同文書には、1920・30 年代の日本人・中国人移民の共産主義運動に関する旧ソ連の第一級の一次史料が多数収められており、その中には矢野勉（将月令助）の履歴書が含まれていることが加藤哲郎によって明らかとなっている⁷。

一方で、近年ではゾルゲ事件研究とは別にハワイ研究・沖縄ディアスポラ研究の文脈で、木元伝一に関する研究の成果が表れ始めている。木元伝一は、1947 年にハワイにおける労働者向け新聞『ハワイスター』の創刊に携わり、1951 年にはスミス法違反の容疑で逮捕される 7 人、いわゆる「ハワイセブン」の一人となり、メディア史研究では、ハワイにおけるマッカーシズムの被害者としての位置づけがなされてきた⁸。原山浩介は、この『ハワイスター』における木元伝一の役割を明らかにするとともに、ハワイにおける労働運動ないし社会運動の様相を明らかにしている⁹。また、増淵あさ子は、木元が創刊した『ハワイスター』の、ハワイの沖縄移民をはじめ、世界各地に暮らす沖縄出身者を結びつける意見交換の場としての役割を明らかにしている¹⁰。

なお、筆者はアメリカ国立公文書館所蔵の矢野勉に関する資料である「豊田令助ファイル」の開示請求をケントステイト大学ブライアン・ハヤシ（Brian Hayashi）の協力を得て行ってきた。その結果、2022 年 10 月のアメリカ国立公文書館での史料調査で以て、新たに公開された「豊田令助ファイル」の収集及び分析を行った。本研究は、これまでのゾルゲ事件研究とハワイ・沖縄研究の成果を架橋し、従来のゾルゲ事件研究では看過されてきた冷戦初期 FBI にとってのゾルゲ事件の持つ意味を明らかにしたい。

⁴ 加藤哲郎「ゾルゲ事件の新資料—米国陸軍諜報部（MIS）『木元伝一ファイル』から」日露歴史研究センター事務局編『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』25 号、日露歴史研究センター事務局、2010 年。

⁵ 比屋根照夫「在米時代の宮城与徳とその周辺群像：孤高の移民画家の肖像」『沖縄文化研究』第 42 号、2015 年。比屋根照夫「沖縄の歴史意識が生んだ非戦反戦の思想」『現代の理論』第 23 号、2010 年。

⁶ Fowler, Josephine. *Japanese and Chinese Immigrant Activists: Organizing in American and International Communist Movements, 1919-1933*. New Jersey, and London: Rutgers University Press, 2007, pp.45-47.

⁷ 加藤哲郎「米国共産党日本人部研究序説：藤井一行教授遺稿の公開によせて」『アリーナ』中部大学国際人間学研究所編、第 20 号、2017 年、497 頁。

⁸ Chapin, Helen Geracimos. *Shaping History: The Role of Newspapers in Hawai'i*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 1996, pp.201-210.

⁹ 原山浩介「労働者向け新聞『ハワイスター』の時代—太平洋戦争後のハワイにおける思想状況の断面」朝日祥之・原山浩介編『アメリカ・ハワイ日系社会の歴史と言語文化』東京堂出版、2015 年。

¹⁰ 増淵あさ子「ディアスポラと救済運動：ハワイにおける「沖縄救済」の系譜を考える」『「東アジア連続講演会」講演録+研究報告集』東京外国語大学国際日本研究センター、2022 年、44-49 頁。

1. アメリカ共産党日本人部と矢野勉

本章では、戦前アメリカにおける日本人共産主義運動の展開、特に西海岸における在米日本人ネットワークが、どのようにゾルゲ事件関係者（矢野勉・木元伝一）や FBI の捜査対象へと連関していったのかを明らかにするため、先行研究に基づいて歴史的背景を概観する。

1919 年に結成されたコミンテルンは、世界革命の実現を企図し、各国における革命運動を指導する国際共産主義運動の母体として、1943 年まで活動する。1922 年にはコミンテルンのイニシアチブにより、コミンテルン日本支部として日本共産党が設立される。その設立の経緯からしても、また、日本国内における厳しい弾圧状況からしても、日本共産党はその指導においてコミンテルンからの強い影響下に機能する組織であった。1922 年テーゼ、1927 年テーゼおよび 1932 年テーゼもコミンテルンの下で決定された方針であった。また、1928 年 3・15 事件によって日本共産党の日本国内の活動基盤が壊滅的状况になった後は、新しい指導部がコミンテルンの一機関であるクートベ（東方勤労者共産主義大学）出身者から補充されることが多くなっている¹¹。このコミンテルンからの日本の共産主義・社会主義運動への接触・指導においては、モスクワを起点とする「西回り」（モスクワ-アムステルダム-ニューヨーク-メキシコシティ）と「東回り」（モスクワ-シベリア-上海）のルートが存在した¹²。これら双方のルートにおいて、戦前日本の共産主義運動にとって、在米日本人共産主義者は、コミンテルンと日本の社会主義者の媒介として機能していたのである。

ゾルゲ事件の宮城与徳を派遣するに至った在米日本人の共産主義運動の沿革については、既に加藤哲郎が宮城与徳訊問調書、特高警察関係資料、アメリカ議会図書館所蔵アメリカ共産党資料を駆使する形で詳細を明らかにしているが¹³、本稿では矢野勉・木元伝一の戦前・戦後を明らかにする上で、彼らの西海岸における活動の背景の概略を示すことにする。

1919 年、ニューヨークにおいて片山潜の指導の下、在米日本人社会主義団が結成される。1921 年頃にはこの在米日本人社会主義団がアメリカ共産党内の日本人グループとして組み込まれ、片山がソ連に渡った後は、片山がモスクワのホテル・ルックスから書簡を通じて密接な連絡を取り、在米日本人共産主義者の活動を指導し続けた。これらの在米日本人社会主義団たちは、日本共産党の綱領作成過程などにおいても、大きな役割を果たすことになる¹⁴。

¹¹ 石堂清倫「外事警察概況解題」内務省警保局編『極秘外事警察概況第 1 巻昭和 10 年』龍溪書房、1980 年、1-2 頁。

¹² 山内昭人『初期コミンテルンと在外日本人社会主義者：越境するネットワーク』ミネルヴァ書房、2009 年、1 頁。

¹³ 加藤哲郎、前掲論文、2017 年、399-497 頁。

¹⁴ これらの在米日本主義者団には、吉原太郎、田口運蔵、石垣栄太郎、渡辺春男、野中誠之などが含まれていた。山内昭人、前掲書、140-176 頁。Fowler, Josephine. *Japanese and Chinese Immigrant Activists: Organizing in American and International Communist Movements, 1919-1933*. New Jersey, and London: Rutgers University Press, 2007, pp.38-40.

なお、ジョセフィン・フォウラーによれば、この東海岸の在米日本人共産主義者のグループから、1924 年に東洋人支部が設立される。この東洋人支部から数名が、西海岸の日本人共産主義活動の組織化を目的にロサンゼルスに派遣された。彼らは、黎明会など既に急進的政治的潮流のあった沖縄人コミュニティと合流する¹⁵。このように、アメリカ共産党本部が置かれていたニューヨークを拠点に活動していた在米日本人の共産主義運動が、西海岸における在米社会主義運動と連携を取って発展していくことに、日本の内務省警保局は警戒を強めることになる。

こうした日本側の警戒の背景には、共産主義運動の宣伝ルートが大きく変化したことがある。従来はウラジオストック・上海を通じていた対日宣伝ルートが、コミンテルン第 7 回大会以降はアメリカ方面からのルートへと変化していたことがある。その最大の理由は、上海を拠点として東アジアの共産主義運動の地下活動ネットワークを指導していた汎太平洋労働書記局（PPTUS：Pan-Pacific Trade Union Secretariat）のイレール・ヌーラン（Hilaire Noulén）が 1931 年 6 月 15 日に上海租界警察に逮捕されたことであった。1927 年には、中国・日本・朝鮮を含む幅広い東アジア地域の労働運動を指導するために、汎太平洋労働書記局が組織され、上海を経由として活動資金の送金やモスクワのコミンテルン中枢の指令の伝達が行われており、その中核として活動していたのがヌーランであった¹⁶。そして、この汎太平洋労働書記局こそが、ソ連の諜報活動に従事するアメリカ共産党員を最も多く生み出した供給源だった。後にアメリカ共産党書記長となるアール・ブラウダー（Earl Browder）が汎太平洋労働書記局の初代書記長に就任した他、ユージン・デニス（Eugene Dennis）、スティーブ・ネルソン（Steve Nelson）、マーガレット・アンジャス（Margaret Undjus）、チャールズ・クランベイン（Charles Krumbein）といったアメリカ共産党の多くの指導者が中国で地下活動に携わっていた¹⁷。そして、矢野勉のアメリカ西海岸における地下活動もまたこの汎太平洋労働書記局の活動の一環としてであった。1930 年頃、中国における日本の軍事活動およびソ連に対する軍事攻撃の準備に対抗することを最重要課題として、サンフランシスコに汎太平洋労働書記局のサンフランシスコ支部が設立され、モスクワのプロフィンテルンの強い意向を反映して 1932 年にサンフランシスコに派遣されたのが矢野勉であった¹⁸。矢野勉は汎太平洋労働書記局のサンフランシスコ支部において、地下活動の経歴が長いベテラン共産党員のハリソン・ジョージ（Harrison George）の補佐をする。ソ連崩壊後に公開されたロシア現代史資料保存研究センター（RTSKhIDNI）所蔵の文書には、この時期の矢野勉の活動の一端が示されている。例えば、矢野勉はハリソン・ジョージとともに田中上奏文をアメリカ共産党の機関紙で取り上げることを議論しており、当該の議事録は田中上奏文のソ連作成説を補佐する証拠としても価値があるもので

¹⁵ Fowler, Josephine. *Japanese and Chinese Immigrant Activists: Organizing in American and International Communist Movements, 1919-1933*. New Jersey, and London: Rutgers University Press, 2007, pp.45-46.

¹⁶ 鬼丸武士 『上海「ヌーラン事件」の闇：戦間期アジアにおける地下活動のネットワークとイギリス政治情報警察』書籍工房早山、2014 年、36-37 頁、72-76 頁。

¹⁷ ハーヴェイ・クレア、ジョン・アール・ヘインズ、F・I・フィルソフ他『アメリカ共産党とコミンテルン：地下活動の記録』五月書房、2000 年、82-83 頁。

¹⁸ Fowler, Josephine. "From East to West and West to East: Ties of Solidarity in the Pan-Pacific Revolutionary Trade Union Movement, 1923-1934," *International Labor and Working-Class History* no. 66 (2004). p.108.

ある¹⁹。そして、矢野勉がサンフランシスコに派遣された背景には、この時期の西海岸における日本人共産主義運動ネットワークの立て直しの側面もあった。この時期の西海岸における日本人共産主義運動ネットワークの再建については、後章で改めて詳しく検討する。

2. 矢野勉とは何者だったのかー「豊田令助ファイル」の公開からわかる経歴

本章では、ゾルゲ事件の構成員である宮城与徳が日本に派遣されるに至った背景を明らかにするため、その派遣に関与した矢野勉の経歴を明らかにする。矢野の経歴は、従来のゾルゲ事件研究ではほとんど未解明であり、CIC 史料に含まれる FBI による戦後の捜査資料の公開によって初めて浮かび上がるものである。

1949 年 8 月-11 月にかけて矢野勉が FBI に供述した内容によれば、宮城与徳の日本派遣に関与した矢野勉こと豊田令助の経歴は下記となる²⁰。

矢野勉は 1894 年 12 月 10 日新潟県佐渡夷町で生まれる。1910-1915 年に新潟県立佐渡中学校に、1915-1916 年に高田師範学校に通い、小学校教員免許を取得する。そして、1918 年から 1919 年にかけて東京高等師範学校に進学。1918 年 8 月に高等学校教員の資格試験に合格する。その後、1919 年 11 月に後藤令助という名前で鹿島丸に乗り、アメリカのワシントン州シアトルに入国する。後藤の姓でアメリカに入国したのは、当時、後藤エイという女性と婚約していたことによる。なお、この後藤エイが日本国内で離婚の訴訟を行ったために、1922 年 11 月に離婚が成立したため、豊田令助という名前に切り替わっている。アメリカのシアトル入国後には、1927 年頃まで西海岸で過ごした後、ニューヨークに移り、1928 年に後藤令助という名前でアメリカ共産党に入党する。その頃には既に、矢野勉はモスクワのクートベに入学したいという希望を抱いていた。モスクワへの渡航を見越し、ニューヨークのアメリカ共産党本部を訪問し、当時の党首であったジェイ・ラブストーン (Jay Lovestone) に対しモスクワの学校への進学希望を伝えたところ、ラブストーンから身分証明書を渡され、ソビエト当局に提示するよう伝えられる。

こうして矢野勉は、アメリカへの再入国許可を取得せずに 1929 年 10 月 11 月頃にアメリカを出発し、パリに到着後ラブストーンから提示された証明書をソビエト領事館に提示を行う。その後、パリからモスクワに向かい、クートベに 10-11 か月在籍し、ロシア語、地理学、社会学、共産主義の基礎を学ぶ。

クートベで学んだ後に向かったのがドイツであった。ベルリンでアメリカ総領事館を訪問した矢野勉は、シアトルでアメリカに入国した際に使用した日本のパスポートでは再入国できないことを告げられる。そ

¹⁹ ハーヴェイ・クレア、ジョン・アール・ヘインズ、F・I・フィルソフ他、前掲書、94-99 頁。

²⁰ FEDERAL BUREAU OF INVESTIGATION, File No.100-29440, November 30, 1949, Folder TOYOTA Reisuke, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II.

の後、ベルリンの日本領事館を訪問し、将月令助という本名で商業用パスポートを発行される。その後、ロンドンにあるアメリカの総領事館を訪問し、このベルリンで発行された将月令助名義のパスポートに基づいて、アメリカに入国するためのビザを取得する。

1930 年秋、ニューヨークに到着した矢野勉は、ニューヨークにてアメリカ共産党日本人部の活動に積極的に参加することになる。ニューヨークに短期間滞在した後に、シアトル経由でサンフランシスコに戻る。サンフランシスコでは、アメリカ共産党日本人部の責任者を務め、アメリカ共産党日本人部機関紙である『労働新聞』の編集者としても活動を行う。矢野勉は、1933 年春までアメリカ共産党日本人部での活動を続けた。

その後、1944 年 7 月頃に、コロラド州デンバーで共産主義政治協会 (Communist Political Association) に加入している²¹。矢野勉は、この時の共産主義政治協会への加入について、日本の軍国主義を打倒するために役立ちたかったからだとしているが、このことは矢野勉が日本に帰国する直前まで共産主義への信念を崩していなかったように推測される。なお、矢野勉はアメリカの第二次世界大戦期の情報機関である CIA の前身の OSS (Office of Strategic Services : 戦略情報局) に採用され、ビルマやインドに派遣されることをめざしていたため、共産主義政治協会の関係を断つことになる。当時、OSS 内部にある MO (Morale Operations : 士気工作部) は、敵軍や民間人の内部で混乱を生じさせるために偽情報を流布するブラック・プロパガンダの活動を担っていた²²。OSS での MO では日系、中国系、朝鮮系のアメリカ人の採用が行われるなどしたが²³、日系アメリカ人の場合、左翼思想への確固たる信念と宣伝活動の経験が重要視されたため、日系アメリカ人の OSS 採用者は左派が多く、アメリカ共産党日本人部所属の者が重要な役割を果たすなどした²⁴。実際、1944 年に矢野勉も OSS に対日宣伝工作のために雇用されるに至る。ただし、セキュリティ上こうした共産主義活動が警戒されたためか、OSS の矢野勉の採用はかなり消極的な形、しかも、厳重な監視を伴う形での採用であった。OSS 史料によれば、矢野勉は「通常であれば『安全保障上不承認』とされるべきであるが、彼の雇用に伴う可能性のある危険性は、本部および各部門長に完全に認識されている。しかし、必要な資格を持つ教育を受けた日本人が非常に不足している状況であり、また、厳重に監督された日本人グループの中で業務が行われるという物理的な安全性について十分に調査した結果、以下の条件に基づき、限定的な安全保障の承認が推奨される」と記載されていることから見ても取ることができる²⁵。

²¹ 1943 年 6 月には英米との連帯を重視したソ連は、アメリカからの援助を受けやすくするためにコミンテルンを解散する。この方針を受け、アメリカ共産党書記長アール・ブラウダーは、1943 年 11 月末のローズベルト、チャーチル、スターリンの三者会談を高く評価し、三国連携強化の観点からアメリカ共産党を解党し、1944 年 5 月に共産主義政治協会に作り替えられていた。芳賀武『紐育ラブソディ：ある日本人米共産党員の回想』朝日新聞社、1985 年、316-317 頁。

²² Brian Masaru Hayashi, *Asian American Spies: How Asian Americans Helped Win the Allied Victory*, New York: Oxford University Press, 2021, p.12.

²³ Ibid. pp.44-45.

²⁴ Ibid. pp.86-87.

²⁵ Toyota, Reisuke 22,151, November 14, 1944, Folder Toyota, Reisuke, Box783, Entry#A1 224, RG226, NARA II.

3. アメリカ共産党第 13 区所属日本人部と矢野勉

本章では、矢野勉が西海岸に派遣された背景を、アメリカ共産党日本人部内部の分裂と再建という視点から検討する。とりわけ、矢野がどのようにして党内対立を調停し、再建に貢献したかを確認することで、矢野勉の役割とその後の宮城与徳との接点を浮かび上がらせる。

矢野勉が派遣される前の西海岸における共産主義運動は、アメリカ共産党第 13 区所属の日本人が担い、その中心的存在が健物貞一であった。健物貞一は早稲田大学を卒業後、1923 年にアメリカに渡り、1924 年にアメリカ共産党に入党する²⁶。東部から派遣されていた在米共産主義者らと協力する形で「階級戦社」を設立し、月刊誌の『階級戦』を創刊し、後に『労働新聞』としてアメリカ共産党の機関紙となる²⁷。

しかし、その後 1928 年初頭に、アメリカ共産党第 13 区に所属する在米日本人同士の間での深刻な内部対立が発生する。アメリカ共産党員の三浦武雄、井上元春一派が、健物貞一派と対立し、その対立が影響して一時機関誌の発行・党活動の停止にまで至る。そうした状況の中で、クートベから派遣されたのが矢野勉であった。クートベからアメリカに戻った矢野は当時アメリカ共産党ニューヨーク第 2 区に所属していた。サンフランシスコに派遣された矢野は健物貞一派を支持し、健物貞一への反対派を清算することで、アメリカ共産党機関紙『労働新聞』の再刊にこぎつけるに至った²⁸。

その後、1932 年春にアメリカ政府によってアメリカ共産党第 13 区のリーダー格である健物貞一、小林勇の両名が検挙され国外追放処分を受ける。次いで、堀内鉄治、箱守改造、福永興平らもロサンゼルスにて検挙され国外追放処分を受け、ソ連に亡命を行う²⁹。アメリカ政府によって検挙・国外追放処分を受けた後、アメリカ共産党第 13 区所属の日本人は、約 40 名にすぎないという壊滅的状况に陥っていた。このように、この時期の矢野勉はアメリカ共産党日本人部の内部対立と、アメリカ政府による検挙の双方によって壊滅状况にあったアメリカ共産党日本人部再建の役割を担っていたといえる。宮城与徳をソ連の情報活動のために工作員としてリクルートした矢野勉の行動は、こうした党活動の延長線上にあった。すなわち、矢野勉はアメリカ共産党の表の活動と裏の活動の結節点に位置していたのである。

²⁶ 田村紀雄「新聞『階級戦』と剣持貞一——1920 年代サンフランシスコ・日本町——」『東京経済大学人文自然科学論集』122 号、2006 年、57-58 頁。

²⁷ Fowler, Josephine. *Japanese and Chinese Immigrant Activists: Organizing in American and International Communist Movements, 1919-1933*. New Jersey, and London: Rutgers University Press, 2007, pp.45-47.

²⁸ 内務省警保局編『極秘外事警察概況第 2 巻昭和 11 年』龍溪書房、1980 年、284-285 頁。

²⁹ 箱守改造、福永興平を含む 1932 年にソ連に亡命したアメリカ共産党日本人部の人々はソ連に粛清されていたことが今日では明らかとなっている。藤井一行「コミンテルンと日本人粛清」『アリーナ』20 号、2017 年。

4. 矢野勉のコミンテルンからの追放：ジョー小出と矢野勉の対立

本章では、1930年代前半におけるアメリカ共産党日本人部内の人事抗争とその国際的背景を検討する。特に、クートベ出身の矢野勉が党内での主導権を喪失した過程、レーニン・スクール出身のジョー小出の浮上に着目する。この過程を通じて、野坂参三によるアメリカでの工作活動および木元伝一との関係を明らかにする。

矢野勉はコミンテルンの方針により1934年頃に失脚する。宮城与徳の手記によれば、「昭和九年に至りコミンテルンは党組織者矢野の組織方針の間違を指摘し、其の批判が行はれたが、三度に亘る矢野の反駁となり其結果矢野及び彼を支持する赤城鉄、中村幸輝外二、三名党员は党除名となつた」とある³⁰。

この時、矢野勉のアメリカ共産党内部での失脚の転機となったのが、同じくアメリカ共産党党员であり、コミンテルンの指示の下西海岸に移動したジョー小出であった。ジョー小出は、1902年生まれで本名を鵜飼宣道といい、憲法学者の鵜飼信成は実弟である。太平洋戦争時には、OSSにリクルートされ、OSSが実施した対日プロパガンダ工作であるコリングウッド・プロジェクトにおいて天皇制批判の回避など重要な役割を果たす³¹。小出は、矢野がクートベでの訓練を受けニューヨークの党本部に戻った1か月後に、モスクワ入りし、モスクワのレーニン・スクールに入学していた。レーニン・スクールは、革命を実現する幹部を養成する目的で設立された組織であり、各国共産党の中央委員級の幹部が入学し、アメリカ共産党からは、クラレンス・ハサウェイ (Clarence Hathaway)、チャールズ・克蘭ベイン、ルディ・ベーカー (Rudy Baker) などがいた³²。モスクワのレーニン・スクールは、ソ連共産党付属の上級党幹部養成学校であり、クートベよりもランクが高い各国共産党中央幹部養成の位置づけとなっていた³³。

矢野勉のアメリカ共産党内部での失脚は、レーニン・スクールで学んだ小出のコミンテルンによるサンフランシスコへの派遣が大きな転機となっていた。小出は、1933年にレーニン・スクールからニューヨークへ戻った後、サンフランシスコへ派遣された。戦後、この時について、小出は大森実のインタビューで次のように語っている³⁴。「サンフランシスコに来て、サム・ダーシーに会ったとき、日本人がもう一人そこにいて『太平洋労働者』の翻訳をやっていた。ハリソン・ジョージが編集した『太平洋労働者』米国版の第一号の翻訳を、その帰米二世の男がやっていた。ハリソン・ジョージは誰かが来ることを知っていたんですよ。

³⁰ 『現代史資料 3 ゾルゲ事件3』みすず書房、1962年、341頁。宮城与徳は日本派遣後のアメリカ共産党日本人部内部のこうした動向を一時帰国していたアメリカ共産党员赤城鉄（竹本康雄）から聞いていた。

³¹ 山本武利『ブラック・プロパガンダ：謀略のラジオ』岩波書店、2002年、106-128頁。

³² ジョー・コイデ『ある在米日本人の記録：レーニン学校から日米開戦まで 上』有信堂、1967年、25-27頁。

³³ 加藤哲郎、前掲論文、2017年、462-464頁。

³⁴ 大森実『戦後秘史 3 (祖国革命工作)』講談社、1975年、300-301頁。

そこにぼくが来たものだから、その男に用がなくなったんです。その場合どうするかというと、アップステア（二階）に送るしかないでしょ。だからレーニン・スクールに送ったんです。」小出は、この帰米二世については、「ハワイ生まれの帰米二世で、ジャックという名しか知らない。この男をモスクワに送り込んで、ぼくとハリソン・ジョージが、えらく苦勞して仕事をしたのです。」と述べている。このジャックという名前のハワイ生まれの帰米二世こそが、ジャック木元こと木元伝一であった。矢野勉と同じく宮城与徳の日本派遣に関わるロイである。この時期、木元もまた矢野勉と同様に、ハリソン・ジョージと共にアメリカ共産党の地下活動を担っていたのである。

1933 年の小出のサンフランシスコ派遣に伴い、木元はモスクワのレーニン・スクールに派遣されたが、矢野勉の場合は党内の内紛をもたらす形となった。同じく大森実のインタビューでは矢野勉について、小出は次のように語っている。「あのとき、東方勤労者大学、通称クートベを卒業したのち、レーニン・スクールに入れてもらえずにアメリカに送られた男が、ナショナル・ビューローのヘッドをしていたんです。いわゆるアメリカ共産党日本人部部長という肩書きです。日本の高等師範の出身でね。見たところはとても堅牢で、労働者の恰好をしているけど、根がインテリなんです。田中さん（山本懸蔵）が信用しないで、レーニン・スクールに入れなかったのです。その男も辞めさせろという命令が、モスクワから届いたんです。そのころはなんのためにそんなことをするかわからんでしょ。その男を辞めさせたことでえらい目にあったんです。上から辞めさせたのですが、周囲はぼくがその男をクビにしたと思いますわね。この事件を通じて、ぼくの存在がバレました。『ジョー・小出というヤツがオレを辞めさせた』と、ぼくは悪者にされた。1933 年（昭和 8）の冬ですよ。暮れですよ。その男を辞めさせると、すぐあとに、岡野・・・野坂参三がパツと顔をだしたんですよ」。

このジョー小出の証言は、矢野勉に関する FBI 史料でも裏付けられる。1949 年 8 月 8 日に矢野勉が FBI に対して行った供述では、矢野勉がクートベから 1930 年にニューヨークに戻ったタイミングで小出がモスクワのレーニン・スクールに入学したこと、および、モスクワから戻った小出がサンフランシスコに到着するやいなやアメリカ共産党日本人部での矢野勉の指導方針が日本人だけを対象としているとして問題視したことが記されている³⁵。矢野勉の FBI への供述によると、小出の矢野の指導力に対して行った批判は矢野を苛立たせ、小出に対し自分こそがアメリカ共産党日本人部公認の組織者であり、党活動については小出の助言を必要していないと小出に明言した。矢野勉は自身のアメリカ共産党日本人部での失脚を、コミンテルンによる指令ではなく、ジョー小出個人の策謀として認識していたのである。この小出による矢野勉に対する批判の後に、アメリカ共産党のニューヨーク本部から、カリフォルニア州のアメリカ共産党指導者であるサム・ダーシー (Sam Darcy) に矢野勉のアメリカ共産党日本人部での活動に対する批判の書簡が届けられ、サム・ダーシーはアメリカ共産党日本人部での会合を招集し、矢野勉への批判を行う。その結果、矢野勉はサンフランシスコからシアトルへと転任させられ、間もなくサンフランシスコに戻るも、アメリカ共産党を

³⁵ REISUKE TOYOTA, was, March 14, 1951, Folder TOYOTA Reisuke, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II.

離党するに至る。

この時、アメリカに派遣された野坂がジョー小出の補佐を受けながら行ったのは、ジョー小出によれば下記の 3 つである³⁶。一つは、海員を組織して日本に文書を送り、日本からの文書を受け、情報を収集する。この時期の日本への文書送付には、1935 年のコミンテルン第 7 回大会におけるゲオルギ・ディミトロフ (Georgi Dimitrov) の報告、つまり、従来の社会民主主義打倒方針の転換、反ファシズムを軸とする人民統一戦線の方針を『国際通信』などを通して日本に伝える意味合いがあった。もう一つは、石垣栄太郎の妻、石垣綾子を、羅府新報の寄稿家として活用すること。そして、もう一つが、加藤勘十をアメリカに呼び寄せ野坂との会談を実現させることであった。加藤哲郎の研究によれば、この時期の野坂参三のアメリカでの活動は、ディミトロフ、ブラウダーらコミンテルン上層部で決定し、またコミンテルン秘密諜報活動の専門家のルディ・ベーカーが指揮をとる、国際的工作の重要な一環だったとしている³⁷。そして、この野坂のアメリカでの活動のサポートには、ジョー小出だけでなく、木元伝一も関与していた。渡部富哉の研究によれば、この野坂参三と加藤勘十のアメリカでの会談で通訳と案内を行っていたのが木元伝一であった³⁸。そして、木元と矢野の奇妙な交錯は、戦後の FBI による矢野勉への尋問という形で再び交わることになる。

5. 「豊田令助ファイル」の史料公開からわかる FBI にとっての矢野勉

前章まででは、矢野勉の経歴および彼が関与したアメリカ共産党日本人部の活動について、主に戦前の視点から整理してきた。本章では、戦後アメリカによるゾルゲ事件の再調査、特に FBI の主導によって行われた矢野勉への尋問に着目する。新たに公開された「豊田令助ファイル」は、FBI がゾルゲ事件を国内安全保障の脅威として重視していたことを示す重要な証拠群である。

アメリカ国立公文書館で新たに機密解除された「豊田令助ファイル」でまず目を引くのは、文書冒頭に収められているインデックスである。特に、インデックス中の、「関連人物 (CO-SUBJECTS)」の項目には、リヒャルト・ゾルゲ (Richard Sorge)、宮城与徳といったゾルゲ事件関係者のみならず、矢野勉の別名 (将月令助、後藤令助など) が記載されている他、ジョー小出 (鵜飼宣道)、健物貞一、鬼頭銀一、木元伝一といったアメリカ共産党日本人部関係者、ハリソン・ジョージ (Harrison George)、サム・ダーシーといったアメリカ共産党幹部の名前が記載されている³⁹。本稿で後述するように、CIC は矢野勉を、宮城与徳のアメ

³⁶ 大森実、前掲書、304-305 頁。

³⁷ 加藤哲郎『情報戦と現代史：日本国憲法へのもうひとつの道』花伝社、2007 年、199-200 頁。

³⁸ 渡部富哉、前掲論文、2010 年、18-20 頁。

³⁹ INDEX TRACING RECORD OF ALIASES AND COSUBJECTS, Folder TOYOTA Reisuke, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II.

リカから日本への派遣に関与した人物として取り調べを行っていた。さらに、インデックスからわかるように、CIC の関心はゾルゲ事件に留まるものではなく、アメリカ共産党日本人部、およびアメリカ共産党という 3 つの観点から矢野勉への尋問・調査に及んでいたことが分かる。

これまでのゾルゲ事件研究において、戦後アメリカによるゾルゲ事件の追及の主体として取り上げられるのは、CIC および CIC の上部組織である G-2、そして、G-2 を率いるチャールズ・ウィロビー (Charles Willoughby) である⁴⁰。この点は、ウィロビー自身が回想録の中で、G-2 がアメリカ国内の治安という観点から、ゾルゲ事件とアメリカとの関係を調査し、G-2 自身が FBI およびアメリカの治安機関に対して、アメリカ人関係者の調査を勧告したことを述べている⁴¹。

しかし、新たに公開された「豊田令助ファイル」は、FBI もまた CIC と同等以上にゾルゲ事件に強い関心を抱いていたことを示している。むしろ、CIC による戦後の矢野勉への尋問及び調査は、FBI の強い要請を受けて行われたものだったものであり、この時期、FBI は CIC とは異なる問題意識をもってゾルゲ事件を調査していた。1951 年 3 月 5 日ジョン・エドガー・フーバー (John Edgar Hoover) FBI 長官発 G-2 副参謀長宛電報は、フーバーが CIC に対し、既に国外追放の処分を受け日本に帰国していた矢野勉に尋問を行い、ゾルゲ事件に関しての追加情報を入手するよう要請するものであった⁴²。FBI は矢野勉の強制送還前に、ゾルゲ事件で宮城与徳を日本に派遣させた「ロイ」というロサンゼルス在住のアメリカ共産党員について情報を得るため、矢野勉に尋問を行っていた。しかし、矢野勉からは「ロイ」との面識および「ロイ」の身元を知っていることを否定されていた。これに関して FBI ロサンゼルス支局は、矢野勉が「ロイ」に関する情報を FBI に供述した場合、アメリカ国内で訴追されることを恐れていた可能性があると判断していた。アメリカの裁判所による訴追の危険性がなくなった日本への強制送還後の現時点であれば、CIC による矢野勉への日本国内での尋問によって、「ロイ」に関する有益な情報が得られる可能性があると判断していたのである。なお、ここで CIC と FBI が早くからゾルゲ事件への問題意識を共有していたことを示す CIC 以外の史料としてゲティスバーグ大学所蔵のウィロビー文書に含まれる、1951 年 2 月 28 日付のウィロビーからフーバー長官宛の書簡を挙げることができよう⁴³。同書簡からは、FBI と G-2 および CIA との間で情報共有及び人的連携があったことが記されている。

FBI による豊田令助への尋問要請によって、CIC による矢野勉への尋問が 1951 年 4 月 30 日に行われる⁴⁴。CIC から尋問内容を受けたフーバー長官は、宮城与徳尋問調書中の身元不明の白人および「ロイ」に関する情報について、再度の情報提供を要請していた。FBI は、宮城与徳の交友関係の大半が日本人であることから、「ロイ」は日本人であると推察し、「ロイ」の追及に必死な様子が見て取れる。また、フーバー長官から矢野勉に関しての CIC への問い合わせは、1949 年 11 月 17 日の時点から始まっていることが確認でき

⁴⁰ 加藤哲郎『ゾルゲ事件：覆された神話』平凡社、2014 年、102-113 頁。

⁴¹ C.A.ウィロビー『GHQ 知られざる諜報戦：ウィロビー回顧録』山川出版社、2011 年、120-121 頁。

⁴² John Edgar Hoover to Assistant Chief of Staff, G-2, March 5, 1951, Folder TOYOTA Reisuke, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

⁴³ C.A. Willoughby to J. Edgar, Hoover, February 28, 1951, Folder 7-17, Box7, Papers of the Major General Charles A. Willoughby, Gettysburg College.

⁴⁴ John Edgar Hoover to Assistant Chief of Staff, G-2, May 29, 1951, Folder TOYOTA Reisuke, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

るが⁴⁵、その文書のすべてに、「INTERNAL SECURITY-R」もしくは「ESPIONAGE-R」という分類が表題で記載されている。このことから、FBI はゾルゲ事件をアメリカ国内の安全保障にかかわる諜報事件として位置づけ、CIC に対して矢野勉への尋問を要請していたことがうかがえる。このように、FBI はゾルゲ事件を単なるアメリカ国外の諜報事件とは捉えていなかった。アメリカ国内の安全保障上の脅威とみなしており、その捜査の一環として矢野勉に注目していたのである。本章で確認した FBI と CIC の連携体制をふまえ、次章では、木元伝一（ロイ）に対する FBI の調査とその背景について検討する。

6. 木元伝一への FBI による捜査の延長線上にあった矢野勉

前章では、FBI が戦後の矢野勉に強い関心を寄せ、CIC を通じて尋問を行っていた事実を確認した。本章では、その背景にあった木元伝一＝「ロイ」への FBI による長期的な警戒と捜査に注目し、矢野勉がその延長線上に位置づけられていた事実を検証する。では、FBI がゾルゲ事件を国内の安全保障の問題として把握し捜査対象としていたのは、具体的にどういう経緯があったのであろうか。それを紐解く鍵となるのが、同じ CIC 史料群に含まれている「木元伝一ファイル」である。本史料については既にゾルゲ事件研究の加藤哲郎が分析を行っているが⁴⁶、今回機密解除がなされた「豊田令助ファイル」と照らし合わせることで、FBI の矢野勉に対する追及が、木元伝一に対する捜査を端緒としていたことが明らかとなる。

「木元伝一ファイル」で着目すべきは、FBI のフーバー長官が G-2 に対し、1942 年 4 月 6 日の時点で、木元伝一についての情報提供を行っていたことである⁴⁷。この時、FBI が G-2 に対して提供した情報は、日米開戦の場合に木元を拘禁することに関するものであった。小川真知子の研究によれば、ハワイにおいては FBI と G-2 およびホノルル警察が日米開戦に備えて、ハワイ在住の日本人および日系人の検挙・監禁の準備を開始していた⁴⁸。小川論文によれば、連邦政府および米陸海軍は、日米開戦になった場合に、スパイ活動などを通じて日本軍のために働く者を警戒して、個人のリストを作成するなど対応していたという⁴⁹。CIC 「木元伝一ファイル」に含まれている FBI 報告には、木元が検挙対象となった理由は記載されていないが、「INTERNAL SECURITY-R」、つまり、国内安全保障の観点から 1941 年 10 月 12 日の時点で FBI によってマークされていた⁵⁰。後述のように木元の場合は、日米開戦になった場合の日本軍への協力が懸念されたと

⁴⁵ John Edgar Hoover to Assistant Chief of Staff, G-2, November 17, 1949, Folder TOYOTA Reisuke, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

⁴⁶ 加藤哲郎「ゾルゲ事件の新資料」日露歴史研究センター『ゾルゲ事件外国語文献翻訳集』25 号、2010 年 3 月。

⁴⁷ John Edgar Hoover to Assistant Chief of Staff, G-2, April 6, 1942, Folder Jack D. KIMOTO, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

⁴⁸ 小川真知子「太平洋戦争中のハワイにおける日系人強制収容—消された過去を追って—」『立命館言語文化研究』第 25 号、107 頁。

⁴⁹ 同上。

⁵⁰ JACK DENICHI KIMOTO, alias Denichi Kinoshita, March 6, 1942, Folder Jack D. KIMOTO, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

いうよりも、共産主義活動の経歴からソ連との内通が懸念されていた。つまり、戦後のウィロビーや CIC とのゾルゲ事件捜査の協力体制成立に先立つ形で、既に FBI は国内安全保障の観点から木元をマークし検挙していたのである。それはゾルゲ事件とは全く異なるハワイにおける共産主義への警戒に基づいたものであり、FBI による木元への捜査は、戦後冷戦構造が深刻化した後のマッカーシズムにも先立つ形で行われていた。

こうした FBI による木元への警戒と CIC との協力体制は、日本の降伏後、冷戦構造の強まりと共に強化されていくことになる。この「木元伝一ファイル」でも見て取れるのは、CIC というよりも、むしろ FBI が主体となってゾルゲ事件における「ロイ」の身元を特定しようとする強い姿勢である。この「木元伝一ファイル」においても、フーバー長官自身がゾルゲ事件における「ロイ」の身元特定を国内安全保障の問題としてとらえ捜査協力の要請をしていたことが判明している⁵¹。「木元伝一ファイル」には、FBI からの要請により木元伝一に関するファイルチェックが行われていたことが随所に示されている。この背景には、後述のように 1951 年 8 月 29 日にハワイ州ホノルルの連邦大陪審に、スミス法違反の容疑で起訴していたことがある⁵²。1952 年 3 月 6 日付の文書では、「木元は現在裁判中であるため、必要な情報をできるだけ早く提供する必要がある」と記載されているように、FBI および CIC によるこうした一連の「ロイ」の追及が、木元に対する裁判から行われていた⁵³。実際、CIC は FBI からの要請を受け、矢野勉同様既に日本に帰国していた、木元伝一と交流のあったアメリカ共産党員の池田豊耕への尋問を行っているが、こうした尋問は木元伝一の裁判において池田を証人として活用できるかに焦点を当てたものであった⁵⁴。このように、FBI が矢野勉を戦後も執拗に追及した背景には、戦前から国内治安の対象としてきた木元伝一＝「ロイ」の存在があった。矢野の尋問は、木元をめぐる広範な治安対策の中で位置づけられており、ゾルゲ事件が FBI にとっていかにアメリカ国内の問題であったかを示している。

7. 木元伝一とは何者だったのか

本章では、FBI や CIC がゾルゲ事件との関連から追及した木元伝一（ロイ）の実像について、CIC 史料に含まれるアメリカ陸軍ハワイ（USARHAW）の総括報告を中心に再構成する。木元が単なる共産主義者ではなく、ハワイを拠点とした国際的な対日工作の中核人物であった可能性を検討し、FBI が彼を重視した背景を明らかにする。では、この木元伝一とは何者だったのだろうか。この木元伝一の経歴のいかなる部分がア

⁵¹ John Edgar Hoover to Assistant Chief of Staff, G-2, January 25, 1952, Folder Jack D. KIMOTO, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

⁵² JACK DENICHI KIMOTO, January 8, 1952, Folder Jack D. KIMOTO, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

⁵³ Gordon E. Dawson to Commander-in-Chief, Far East, March 6, 1952, Folder Jack D. KIMOTO, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

⁵⁴ DEPTAR(G-2)WASH DC to CINCFE(G-2)TOKYO JAPAN, March 6, 1952, Folder Jack D. KIMOTO, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

アメリカの安全保障の問題として戦後 FBI が懸念したのだろうか。1957 年 11 月 1 日にアメリカ陸軍ハワイは、国内諜報概要（Domestic Intelligence Summary）という表題で、木元伝一の経歴について総括報告のような形で詳細にまとめている⁵⁵。この表題からわかるように、FBI 同様アメリカ陸軍ハワイもまた、木元を外国における諜報事件の関係者としてではなく、アメリカ国内の安全保障の観点から警戒していた。

当該の総括報告によると、木元の経歴は下記である⁵⁶。ジャック・伝一・木元（Jack Denichi KIMOTO）は、1906 年 3 月 6 日にハワイ準州オアフ島エワにて日本人の両親のもとに生まれた。1912 年から 1914 年にかけてエワ・プランテーション学校に通い、1914 年から 1916 年には日本国内の小学校に通った。1916 年に両親とともに日本から戻ると、木元はエワ・プランテーション学校に再入学し、1920 年の砂糖ストライキの際に家族がエワのプランテーションから追放されるまで在籍している。その後、家族はホノルルに移住し、木元はロイヤル・グラマー・スクールに入学し、1923 年に卒業する。また、1920 年から 1925 年にかけてホノルルの日本語学校であるハワイ中学校を卒業している。

木元は日本語の読み書き能力を有し、日本滞在はわずか 2 年間に過ぎなかったが日本の左翼運動に精通し、ハワイ準州における一世日本人の問題や見解についての深い知識を備えていた。木元は、ホノルルの二言語新聞であるハワイ報知新聞で 1928 年 3 月から 1931 年 5 月まで記者として働き、新聞業界で訓練を受ける。当時、日本国内の左翼運動の高まりを伝える出版物に木元は関心を寄せ、最終的にマルクス主義への関心を持つに至る。マルクス主義への関心が高まるにつれ、木元はハワイ準州内での日本人コミュニティで指導的なマルクス主義者としての評判を獲得していくことになる。アメリカ陸軍ハワイはこの時期のハワイにおける初期のマルクス主義指導者として、木元伝一、新城銀次郎、ジンボ・ギンジロウ（Ginjiro Jinbo）の 3 名を挙げている。なお、この新城銀次郎は沖縄出身の一世で、戦後に『ハワイスター』の木元の後の主筆となり、『ハワイスター』にて米軍による沖縄占領政策を含め沖縄問題を精力的に発信していくことになる⁵⁷。

1931 年に木元は、カリフォルニア州ロサンゼルスに移り、日本語・英語の翻訳者として日本語新聞で働いた。カリフォルニアでは、木元はフーバー政権時の大恐慌の影響で失業した何百万もの失業者と同様に失業を経験し、計画経済への関心を高めていく。こうした関心から、資本主義と社会主義の比較検証にたどり着き、マルクス主義をさらに追及していくことになる。彼が共産主義教育を受けたのはカリフォルニアにおいてであるとされており、1931 年に共産党第 13 地区に「ロイ・レーン（Roy LANE）」という党名で加入し、共産党党员番号 75469 を保持している文書証拠をアメリカ陸軍ハワイはつかんでいた。なお、この点は、ゾルゲ事件研究者の渡部富哉がソ連崩壊後に入手したロシア側の公文書によっても、事実関係が裏付けられている。渡部がロシア人研究者から入手した資料は、木元伝一は 1933 年 10 月 19 日にソ連に入国しレ

⁵⁵ SUBJECT: Domestic Intelligence Summary, USARHAW/25TH INF DIV, Vol.1, Issue 5, November 1, 1957, Folder Jack D. KIMOTO, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

⁵⁶ SUBJECT: Domestic Intelligence Summary, USARHAW/25TH INF DIV, Vol.1, Issue 5, November 1, 1957, Folder Jack D. KIMOTO, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

⁵⁷ 増淵あさ子、前掲論文、45-46 頁。

ーニン・スクールで学び、今後木元を日本ビューローでの指導的な活動の中心にすることを示すものであった⁵⁸。

また、木元は、「ジャック・ヤマタ (Jack YAMATA)」という党名も使用していた。木元は、共産党の活動の一環として、主として翻訳活動に従事していた。アメリカ陸軍ハワイによれば、木元は「『太平洋労働』という共産党の地下組織の機関紙を発行していた」とあるが、おそらくこれは『太平洋労働者』のことを指していると思われる、当該雑誌は、1932 年初めにハリソン・ジョージが太平洋労働書記局のアメリカ事務局の責任者に任命された後、発行された日本語雑誌であった⁵⁹。

また、木元は西海岸の共産主義系新聞『デイリー・ピープルズ・ワールド (Daily People's World)』でも働いていた。ただし、1957 年時点のアメリカ軍ハワイの総括報告で以てしても、野坂参三・加藤勘十のアメリカでの現地会合を木元が調整していた事実や、ジョー小出のレーニン・スクールからのアメリカ帰国と入れ替わる形で、レーニン・スクールに派遣された事実など、木元の具体的な地下活動の詳細を把握することはできていなかったようである。また、アメリカ陸軍ハワイの総括報告では、ゾルゲ事件との関係について全く記載されていなかったことを鑑みると、FBI および CIC は、木元＝ロイ説についての確固たる証拠を得ることができなかったのだろう。むしろ、木元の共産主義活動について重点的に記述されているのは、宮城与徳を日本に派遣した 1930 年代前半の時期ではなく、その後、ハワイに戻った 1938 年以降の活動であることが着目される。

アメリカ陸軍ハワイの総括報告では、1938 年にハワイに戻る前に、木元はアメリカ共産党第 13 地区委員長であるウィリアム・シュナイダーマン (William Schneiderman) から、ハワイ準州での党の組織者として任命される指示を受けた、とされている。ホノルルに戻ると、木元は左翼出版物『労働者の声 (Voice of Labor)』のスタッフに加わり、マルクス主義的な討論グループとしての活動を行っていた。『労働者の声』では、日本語ページの編集を担当し、事務所や自宅で共産党員向けの教化会議を開催していた。

資金不足のために 1939 年に『労働者の声』が廃刊となると、木元は共産党路線を厳格に守る労働組合の出版物『ザ・ヘラルド (The Herald)』の編集スタッフに加わった。同時に、木元はカウアイ島に移住し、左翼的な日本語週刊誌『洋園時報 (Yoen Jiho)』の副編集長兼業務マネージャーを務めた。この時期、木元はハワイ準州共産党中央委員会のメンバーとして認識され、ハワイ在住の日本人を労働組合運動や特にマルクス主義的な討論グループに参加させようとする努力を続けていたとされている。

1942 年から 1943 年にかけて、木元は共産主義者であるジャック・ホール (Jack Hall) (ILWU 地域ディレクター) を補佐し、『ザ・ヘラルド』の発行に協力していた。当時、木元はハワイにおける共産党のリーダーとしてホールに次ぐ存在と見なされており、この期間中に共産党から組織者として週に約 10 ドルの給与を受け取っていた、とされている。また、木元は共産党の方針を解釈する地元の解釈者と見なされていた。

⁵⁸ 渡部富哉「野坂参三、もう一つの仮面を剥ぐ ロイと呼ばれた男の正体」『諸君!: 日本を元気にするオピニオン雑誌』文芸春秋、1998 年 7 月、95-96 頁。

⁵⁹ Fowler, Josephine. *Japanese and Chinese Immigrant Activists: Organizing in American and International Communist Movements, 1919-1933*. New Jersey and London: Rutgers University Press, 2007, p.85.

1943 年 5 月、陸軍情報部の捜査官が、共産主義者の支持者であるアリス・ヒョン（Alice Jyun）とイズカ・イチロウ（Izuka Ichiro）とともに木元がホノルル郊外の農場で共産主義の文献を掘り出しているのを発見した。取り調べの結果、これらの文献は第二次世界大戦勃発直後にホノルルの数名の共産主義者によって埋められたものであることが判明する。木元は捜査官からの質問に対してはぐらかし、好戦的な態度を示したが、取り調べの後に釈放された、とある。つまり、FBI は、ハワイにおけるアメリカ共産党の中心的人物として、太平洋戦争勃発前から国内安全保障の観点から木元に対する警戒を抱き捜査を行っていたのである。

こうした FBI による警戒は、共産主義への過剰な脅威からの根拠のないものでは決してなかったことにも留意しなければならない。和田春樹がロシア現代史資料保存研究センターにて発掘した野坂参三のディミトロフ宛の一連の報告では、アメリカを拠点としたソ連の対日工作の重要性と、その文脈でのハワイにおける対日工作基盤形成の動きが如実に示されている。野坂がディミトロフに報告しているように、この時期の在米対日工作活動の一環として、アメリカから発行された左翼出版物によって、コミンテルン第七回大会で決定された人民戦線戦術が日本の共産主義者に伝えられるなど、在米日本人共産主義運動は日本の労働運動において重要な役割を果たしていた⁶⁰。野坂はディミトロフに対し、アメリカにおける対日工作の要員養成の重要性を、対日工作の「要員の主要な貯蔵庫」という観点から指摘している⁶¹。アメリカ生まれの二世日系アメリカ人に対しては、党学校へ派遣し、日本の諸問題を研究するサークルの組織に、移民一世の在米日本人については、日本国内での日本の運動のために働きうる要員として養成することに、重点が置かれていた。そして、こうした対日工作のための「要員の主要な貯蔵庫」の観点から、「ハワイでの工作」について次のように報告されていることに着目しなければならない⁶²。「ハワイには日本人が 15 万人はいる。これは島の全住民の 40%に当たる。アメリカ共産党の指導下にわれわれの工作を強めようと努めてきた。本年はじめには、その地に派遣した。そこにはわずか 30 人しか共産党員がいないが、多くの日本人が労働組合に組織されている。いまやわれわれの同志は組合活動、党活動のためのよき要員を養成するのに全力を尽くしている」として、「ハワイについての詳細は報告できない。なぜならわれわれはここで工作をはじめたばかりだからである。この工作を強化することがきわめて重要である」とし、ハワイが対日工作活動の新たな拠点として明確に位置づけられていたことが見て取れる。そして野坂の中では、このハワイにおける対日工作ネットワークの構築の責任者として、木元伝一が位置づけられていた可能性が極めて高い。

実際、日本の内務省警保局もまた木元伝一を中心に、ハワイにおける日本人の共産主義運動が展開されつつあることを把握していた。内務省警保局が刊行する『外事月報』には 1939 年 1 月からハワイ共産党の動きが記載されるようになる。内務省警保局外事課『外事月報昭和 14 年 1 月分』にはハワイにおける共産

⁶⁰ 和田春樹『歴史としての野坂参三』平凡社、1996 年、278 頁。

⁶¹ 和田春樹、前掲書、279-280 頁。

⁶² 和田春樹、前掲書、281 頁。

主義運動についてこう書かれている⁶³。「布哇群島は地理的には米本国より遠隔の地にあるのみならず、重要な産業及び労働は全部島内五大米人財閥の掌中にあり、資本家の勢力圧倒的な関係上共産主義的策動の餘地少なく爲めに久しく赤の影響を蒙らなかった。一九三二年頃布哇生れの日本人共産主義者某によって布哇共産黨なるものが創設せられるに至ったが徒らに聲のみ大にして幾何もなく解散状態に陥るに至った」とあるように、1932 年から見られたハワイにおける共産主義運動は下火となっていた。しかし、先述の野坂によるディミトロフ宛報告がなされる 2 年前の 1936 年頃からハワイにおける共産黨の活動が活発となり、その中心に木元伝一が存在していることを次のように記載している⁶⁴。「然るに最近米本土に於ける共産黨の活動が頗る活発となりたる結果、在留邦人は自然その刺戟を受くるに至った。偶々布哇共産黨の指導者たるゼームス・木元が一九三六年、米國共産黨との連絡及び布哇共産黨再建の爲め渡米し、米國共産黨第十三地區桑港市ヘイト街百二十一番地所在の日本人部(白人部もある)に所属し約二ケ年間狂奔したる結果終に米國共産黨との連絡成り、木元は一九三八年二月歸布して茲に新に米國共産黨の支部としての布哇共産黨の再建を見るに至った」。以上の通り、木元伝一は、単なる共産主義者ではなく、アメリカ国内におけるソ連主導の対日工作ネットワークの要員として存在していた。このことは、ハワイセブンのうち少なくとも木元に関しては、純粋なマッカーシズムの犠牲者とはいえないことを示している。そして、FBI のゾルゲ事件における「ロイ」の追及は、冷戦初期のアメリカにおける治安対策と密接に結びついていた。

8. 木元伝一と戦後ハワイ共産主義ネットワークの再建

本章では、1957 年 11 月 1 日付のアメリカ陸軍ハワイの総括報告に基づき、戦後の木元伝一が中心となったハワイ共産黨再建の実態を明らかにする。総括報告によれば、以下のように太平洋戦争終了前後でハワイ共産黨再建のために奔走する木元の活動が記載されている⁶⁵。戦時中ハワイ共産黨は活動を停止していた。しかし、1945 年にフランクリン・ローズベルト (Franklin Roosevelt) 大統領の死後、共産黨の指導者たちがジョン・E・レイネック (John E. Reinecke) 博士の家に集まり、党を再活性化する方法について話し合った。この会合の参加者はレイネック以外に、木元伝一、ジャック・ウェイン・ホール (Jack Wayne Hall)、ラルフ・ヴァノン・ヴォスブリンク (Ralph Vernon Vossbrink)、デイビッド・ヒュン (David Hyun)、ジャック・カワノ (Jack Kawano)、チャールズ・フジモト (Charles Fujimoto)、エイリーン・フジモト (Eileen Fujimoto) であった。なお、この会合はニューヨークの共産黨本部からの指示に基づいて行われたとされて

⁶³ 内務省警保局外事課『外事月報』昭和 14 年 1 月分、34 頁。

⁶⁴ 同上。

⁶⁵ SUBJECT: Domestic Intelligence Summary, USARHAW/25TH INF DIV, Vol.1, Issue 5, November 1, 1957, Folder Jack D. KIMOTO, Box802, Entry#A1 134-B, RG319, Personal Name Files, NARA II

いる。集会では、既存のメンバーと新たな候補者のリストが見直され、どの人物が再編された党に勧誘されるべきかが決定された。レイネックとカワノの指導の下でそれぞれのグループが共産党クラブとして設立された。カワノのグループは当初チャールズとアイリーン・フジモトの家で集会を開いていたが、後に木元の家に変更された。

1945 年から 1946 年にかけて、木元はハワイ共産党の執行委員会の議長を務め、自宅で共産主義の教育や党員向けの会合を開くなどしていた。木元は共産党の再活性化に非常に積極的で、共産党の方針を常に説いていた。また、1945 年には木元はマッキンリー高校で労働経済の授業を多く行い、その際カール・マルクス (Karl Marx) の著書『賃労働と資本』を紹介するなどしている。木元は授業に参加していた民間人や軍人の名前や住所を収集し、軍人には GI 法を利用してカリフォルニア労働学校に通うよう勧めた。この学校は司法省から共産主義のフロント組織として指摘されている。

1946 年、木元は、CIO のハワイ代表であるルドルフ・エスコビッツ (Rudolf Eskovits) のオフィスで、港湾労働者の間で共産党員を組織するための細胞組織「マッケイブクラブ (McCabe Club)」を設立するため、共産主義者の組合員を集めた。この時期の木元の仲間には、共産主義者と特定されたジャック・ホール、ロバート・マクエルラス (Robert McElrath)、アデル・ケンジンガー (Adele Kensinger)、アリス・ヒュン (Alice Hyun)、ドワイト・ジェームズ・フリーマン (Dwight James Freeman)、ジョン・E・レイネック博士が含まれていた。1946 年 3 月、ハワイ共産党の地方大会がオアフ島ココカヒの YWCA ホールで開催された際にも、木元は出席している。

1946 年 8 月または 9 月に木元が司会を務めたマルクス主義の討論会で、日本語新聞『ハワイスター』を発行することが決定される。この新しい出版物の目的は、地元の日本人に軍国主義やファシズムと比較してマルクス主義の優位性を教育することであった。木元はその編集者に任命される。株主や購読者が左派的な編集方針に口頭で抗議し、その方針を真に民主的な新聞に変更するよう要求した際、木元、新城銀次郎、前城守貞は会社への投資を増やし、『ハワイスター』の支配権を獲得する。創刊号では、アメリカの日本や朝鮮に対する占領政策を厳しく批判し、労働者を抑圧していると主張するなどし、タフト・ハートリー法、トルーマン・ドクトリン、マーシャル・プラン、大企業も批判対象となっていた。その一方、『ハワイスター』は、ソ連の政府形態と中国共産党の労働政策を絶賛する主張をおこなっていた。

1947 年、木元はハワイ共産党執行委員会の議長兼広報部長を務め、1947 年の党大会に出席した。木元は日米民主協会 (Japanese-American Association for Democracy: JAAD) に共産主義者を浸透させることに尽力し、JAAD のメンバーに共産主義のイデオロギーを教え、英語を話さないメンバーにはニュースを解説していた。木元は 1943 年 4 月に開催されたハワイ共産党の地方大会に出席し、地方委員会に選出される。1948 年 5 月には、第 5 区第 19 区から民主党地方大会の代表に選ばれ、引き続き様々な共産主義の会合に出席し、共産主義者との関係を保っていたとされる。

以上の活動を見れば明らかなように、木元伝一は戦後ハワイにおける共産主義ネットワーク再構築の中

心的存在であり、FBI にとっても国内安全保障上の脅威として捜査・監視の対象となることは必然であった。

9. ハワイセブン再考—木元伝一の役割を中心に

ハワイの労働運動史・メディア史においてしばしば言及されるマッカーシズムの渦中に逮捕されたハワイセブンの活動の中心には、上記の木元伝一の戦前から戦後にかけてのハワイにおける活動があったことが確認できる。1951 年 8 月 28 日、スミス法違反を理由に逮捕されたのは、ジャック・ホール (ILWU ハワイ支部長)、有吉幸治 (Honolulu Record 主筆)、ドワイト・フリーマン (Honolulu Record 主筆)、藤本・チャールズ・一之 (ハワイ共産党議長)、藤本・アイリーン・トシコ (ILWU 秘書)、木元伝一 (Honolulu Record 従業員)、ジョン・ライネケ (元教師) の 7 名である⁶⁶。これまで見てきたように、この上記 7 人全員が、これまでの木元伝一総括報告の中で、1942 年から 1948 年にかけての木元伝一のハワイにおける共産主義活動に関連したとされる人物であった。

ハワイセブンに関しては、ハワイのメディア史や労働運動史においてしばしば取り上げられる題材ではあるものの、木元伝一はあくまでその中の一人としての扱いが多く十分な検証がなされてきたとは言い難い。ましてやハワイセブンの裁判とゾルゲ事件との関連についてはこれまで一切検証がなされていなかった⁶⁷。また、ハワイセブンの逮捕においては、有吉幸治が創刊した『ホノルル・レコード (Honolulu Record)』の関係者であることが強調されるきらいがある。ハワイセブンの 7 名のうち 4 名が『ホノルル・レコード』に関連するジャーナリストである一方で、『ハワイスター』の直接的関係者が含まれていないからである⁶⁸。このうち、共産主義者であると自白したのは藤本・チャールズ・一之のみであり、また、ハワイセブンの 4 人が日系人であり、3 人の白人のうち 2 人が日本人女性と結婚していることから、マッカーシズムという魔女狩りの熱狂と、日系人差別がもたらしたものとされている⁶⁹。実際、この 7 名は 1958 年 1 月 20 日に最終的に無罪判決が確定されている。

この点において、原山浩介は、逮捕をもたらした根拠となる情報が曖昧である一方、『ハワイスター』関係者が含まれていなかったこと、および、この時期の連邦議会下院に設置された非米活動委員会が『ホノルル・レコード』とアメリカ共産党との関係を問題視しており、非米活動員会においては『ハワイスター』の活動が有吉幸治と共産主義運動を立証する上で参考程度にしか言及されていなかったこと指摘している⁷⁰。

⁶⁶ 原山浩介、前掲論文、115-116 頁。

⁶⁷ ハワイセブンに関しては、Holmes, T. Michael. *The Specter of Communism in Hawaii*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1994. が詳細に検証を行っている。また、北山眞理子はハワイセブンと同時期にハワイにおける労働運動に従事していた元ハワイ共産党員のジャック・カワノについての検証を行っている。Takagi-Kitayama, Mariko. "A Look at the Political Process of Hawaii's Second Revolution: From the Standpoint of Jack Kawano, a Nisei Labor Organizer." 『東海女子大学紀要』20 号、2000 年。

⁶⁸ Chapin, *Shaping History*, p.29 原山浩介、前掲論文、116 頁。

⁶⁹ Chapin, *Shaping History*, p.204.

⁷⁰ 原山浩介、前掲論文、116-117 頁。

しかし、アメリカ陸軍ハワイの木元伝一に関する総括報告を参照すれば、ハワイ共産党およびハワイセブンの活動の中心に木元伝一が位置づけられるべきといえるだろう。何よりも、これまでの先行研究でハワイセブンの逮捕において言及される『ホノルル・レコード』は、有吉幸治が創刊したものではあるものの、木元伝一はこの『ホノルル・レコード』の創刊においても重要な役割を果たしている⁷¹。

このようにみると、FBI およびアメリカ陸軍は、ハワイ共産党の指導者である木元の、ハワイの日系社会における共産主義の浸透活動を、アメリカ国内の安全保障に対する脅威として認識し、この危機意識の延長線上からゾルゲ事件における「ロイ」との関与を疑い、その結果、CIC による矢野勉への尋問につながっていったことが明らかとなる。こうした FBI の問題意識は、CIC およびウィロビーの問題意識と合致したことは言うまでもない。FBI の木元のゾルゲ事件関与の追及は、CIC による矢野勉尋問の結果でも十分な証拠を獲得することができなかったものの、木元をマッカーシズムの純粋な被害者であるとする位置づけは修正を迫られざるを得ないだろう。

おわりに

本研究では、ゾルゲ事件研究における既存の蓄積と、移民研究・沖縄研究といった異なる研究領域で近年進展した成果とを架橋する試みを行った。アメリカ国立公文書館で新たに公開された「豊田令助ファイル」および「木元伝一ファイル」を軸に据え、ゾルゲ事件を冷戦初期アメリカの安全保障および FBI の捜査活動という側面から再考した。ゾルゲ事件研究において未解明だった宮城与徳を日本に送り込んだ矢野勉の詳細な経歴が明らかとなるとともに、戦後 CIC による矢野勉への捜査が、冷戦初期ハワイにおける FBI の捜査活動の延長線上に位置づけられていたことを新たに明らかにした。FBI および日本の内務省警保局という日米両国の情報機関は、戦前から在米日本人共産主義運動についての警戒と監視を行っていた。そして、第二次大戦での日本の敗北以後、ゾルゲ事件の脅威を強く受け止め対応したのは、日本ではなくアメリカの情報機関であった。これまでの先行研究では、戦後ゾルゲ事件の脅威に対応したアメリカ情報機関としては専ら CIC およびウィロビーにのみ言及されることが多かったが、本稿では CIC だけでなく、FBI もまた CIC 同様にゾルゲ事件について脅威を抱いていた事実を検証した。特に、FBI は日本を舞台とする国外諜報事件としてではなく、アメリカを舞台とする国内諜報事件として受け止めたのである。

そしてソ連崩壊後に新たに公開された文書からは、戦後アメリカ陸軍ハワイや FBI による木元への警戒が、共産主義への過剰な警戒心から行われたのではなく、相当程度にまでソ連のエージェントとしての木元の役割に迫りつつあったことが分かる。木元伝一はアメリカ共産党の党員であると同時に、ハワイにおける

⁷¹ Chapin, *Shaping History*, p.201.

日系移民社会における共産主義運動を牽引する存在であった。もちろん、スミス法違反の裁判においても共産主義者であること自体が違法であることはなく、1951年に逮捕された木元を含むハワイセブンの7人全員の有罪判決が、最終的には1958年に覆されるに至っている。ハワイセブンの逮捕は、確かにヒステリーにも近い共産主義への過剰な恐怖心や日系人への差別感情から起因したものかもしれないものの、ソ連崩壊後に明らかとなった文書や日米双方の政府機関の文書を照らし合わせれば、少なくとも木元伝一に対する警戒は、安全保障の観点からはそれなりに根拠のあるものであったことが分かる。アメリカにとっては、アメリカ国内の日本人共産主義運動の展開が、日本を対象とするソ連による工作活動から、アメリカを対象とする工作活動に転換される可能性は無視できないものだったであろう。

なお、本研究課題の解明にあたっては、本来であればアメリカ議会図書館にて公開されているアメリカ共産党関係文書を参照しなければならない。特に、アメリカ共産党関係文書で、アメリカ西海岸及びハワイにおける木元の活動に関連する記述がないかを検証することは必須となるであろうと思われる。さらに、沖縄県公文書館湧川清栄文書にはハワイのジャーナリストでありハワイ州下院議員を務めたローランド・コタニ（Roland Kotani）が生前木元伝一に対して行ったインタビュー記録が所蔵されているものの、未公表の著作物であるためにローランド・コタニの死後70年間は保護期間とされている。そのため、当該史料の公開は2060年を待たなければならないが、インタビュー記録には、ジョー小出や矢野勉、野坂参三との関係や、OWI（戦時情報局：United States Office of War Information）での活動に触れている可能性も排除できない。そのため、本稿は、現時点でアクセス可能な史料をもとに、ゾルゲ事件に対する戦後FBIの捉え方を描き出す試論として位置づけられる。今後はアメリカ議会図書館所蔵アメリカ共産党関係文書の収集と分析によって、矢野勉や木元伝一の国際共産主義運動ネットワークの実態を、ゾルゲ事件研究という枠にとどまらず、冷戦史、移民史といった広範な分野からの更なる探索が求められる。

